2024年10月6日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

「今」 聴かなければ！

［エレミヤ書1章4～13節］

主の言葉がわたしに臨んだ。「わたしはあなたを母の胎内に造る前から  
あなたを知っていた。母の胎から生まれる前に  
わたしはあなたを聖別し 諸国民の預言者として立てた。」

わたしは言った。「ああ、わが主なる神よ  
わたしは語る言葉を知りません。わたしは若者にすぎませんから。」

しかし、主はわたしに言われた。「若者にすぎないと言ってはならない。わたしがあなたを、だれのところへ遣わそうとも、行ってわたしが命じることをすべて語れ。彼らを恐れるな。わたしがあなたと共にいて必ず救い出す」と主は言われた。

主は手を伸ばして、わたしの口に触れ  
主はわたしに言われた。「見よ、わたしはあなたの口に わたしの言葉を授ける。

見よ、今日、あなたに  
諸国民、諸王国に対する権威をゆだねる。抜き、壊し、滅ぼし、破壊し  
あるいは建て、植えるために。」

主の言葉がわたしに臨んだ。「エレミヤよ、何が見えるか。」わたしは答えた。「アーモンド（シャーケード）の枝が見えます。」主はわたしに言われた。「あなたの見るとおりだ。わたしは、わたしの言葉を成し遂げようと 見張っている（ショーケード）。」

主の言葉が再びわたしに臨んで言われた。「何が見えるか。」わたしは答えた。「煮えたぎる鍋が見えます。北からこちらへ傾いています。」

[1] 甘くない「預言」の言葉

　今日から来月一杯まで、旧約聖書の 「エレミヤ書」を一緒に見て行きたいと思います。エレミヤは、紀元前6世紀のあのバビロン捕囚の前と、その捕囚の中で、神様からの言葉を受けて、それをイスラエルの民に語った預言者です。「預言者」と言う時、一般には「予言」をする者、つまり未来に起こる事を予測して語る者と理解されることが多いと思いますが、聖書に登場する「預言者」は違います。” “未来に起こる事を語る”という点では同じと言えますが、聖書の「預言者」は、神様からの言葉を「預かり」それを語るのであって、自分の言葉を語るのではないのですね。だから、本人の身になって考えてみると、これは嬉しくない仕事だと思います。何故ならば、耳障りの良いことを語って歓迎されると言うより、必ず人々から反発を買うことが分かるからです。しんどい仕事です。この仕事に召されるということは、現代の牧師よりもずっと大変だと思います。例えば、ヨナという預言者は逃げましたよね。ヨナも神様の裁きを伝えるように召された人です。そのような任務に誰が喜んで仕えることが出来るだろうかと思ってしまいます。エレミヤも一面「希望の預言者」と呼ばれることもあるのですが（つまり、あなた方に未来と将来を与える、と語りましたから）、しかしその「希望」というのは、神様の前に立ち帰る、ということを前提とした希望です。今日の箇所にも出て来ましたけれども、まず 「抜き、壊し、滅ぼし、破壊する」という裁きを語って、それを通過した後に、神様がもう一度、「建て、植える」（1:10）と言うのです。

今日の第1章は、そのエレミヤの召命（＝神様によって召される）のことが書かれています。ここを読むと「召命」ということが、いかに人間の思いを超えたものであるか、或いは人間の思いに反したものであるかが分かります。エレミヤは、神様からの召しを受けた時にこう言いました。「ああ、わが主なる神よ　わたしは語る言葉を知りません。わたしは若者にすぎませんから。」（1:6）。これは尤もな反応です。私たちはもし召命を受けたなら、皆きっとこのような言葉を言います。「とんでもございません。私はとても未熟な者です。とてもあなたの言葉を語れません」と。しかし、神様にとって、そのように「語れる」とか「語れない」ということは初めから基準になっていないのです。主は「そのように言ってはならない」と言い、「見よ、わたしはあなたの口に わたしの言葉を授ける」（1:9）とエレミヤに言われました。「あなたの能力で語るのではない、わたしが与えるその言葉を語ればよい」ということです。しかも、「まだ若い」ということは問題ではない、何故なら「（あなたが）母の胎から生まれる前に わたしはあなたを聖別し 諸国民の預言者として立てた」(1:5)のだからと言うのです。これは、主なる神様の目は生まれる前から注がれているということ、神様がその召しの責任も取って下さるということを語っておられる訳です。エレミヤは立たざるを得ませんでした。これは、牧師や伝道者になる人たちだけではなく、神様の目に間違いなく留められている点においては、私たち信仰者皆に言われていることだと私は信じます。

[2] 私たちに求められているのは、悔い改め

　神様は、エレミヤにこのような使命を与えました。10節。「見よ、今日、あなたに諸国民、諸王国に対する権威をゆだねる。抜き、壊し、滅ぼし、破壊し あるいは建て、植えるために」。―諸国民、諸王国に対する権威をゆだねると。ユダヤ一国を超えているのです。神様とは本当はどこどこの神とか、限定された神様ではないですよね。主は世界の主です。その意味で神様はこの世界の歴史を治め給う方ですから、どのようにでも導くことが出来るでしょう。しかし神様は、人間との関わりの中でそれをするのです。人々と一緒になってその歴史を作ると言いますか。神様は得体のしれない「運命」ではないのですね。皆さん、創世記のノアの物語を思い出して下さい。あそこで、神様は「地上に人を作ったことを後悔し、心を痛められた」（創6:6）とあります。「心」があるのです。心があるので、人間のために喜んだり悲しんだりなさいます。どうでもよければ放っておくでしょう。でも、神様にはそれが出来ない。ですからノアの方舟も造らせるし、預言者をも送るのです。

　つい先日、日本も新しい総理大臣が決まって、私たち、思うことがあると思います。不安を感じる。「一体これからどうなって行くのだろう」と。果たして信頼できるんだろうか、どうなのだろうかと。しかしふと思うのです。「どうなって行くのかな」と言うだけではあまりに受身の姿勢かもしれないなと思います。私は政治について語ることは決して嫌いではありませんが、こういう旧約聖書を読んで示されることは、政治云々ということより、私たちの信仰の姿勢が問われるなということです。エレミヤが預言した時代も、初めはかりそめの平和を謳歌していた時代であったということのようです。左近豊（教団・美竹教会）という牧師先生はこのように語っています。―『冷めて心を動かすことをやめた時代、その心象風景が冬枯れのようにささくれ立った社会の只中にあって、新しい季節の到来を真っ先に告げる「アーモンド」の花に寄せて、そのヘブライ語の発音「シャーケード」の語呂の発音に合わせて告げます。神はご自分の言葉（審判）を行おうと、期を窺って見張っている（ショーケード）のです。わが世の春を謳歌し、神の峻烈な剣のような言葉を真綿に包まれた甘言のように聞く時代。そこかしこに破滅の兆候が芽生えているのに、それを手軽に治療し、平和でもないのに「平和、平和」と言う言葉に安堵し、冷厳な現実に目を逸らす世界、「主は何もなさらない、我々に災いが臨むはずはない。預言者の言葉は実現しない」と臆面もなく言い放つ時代、そのような時代の只中でエレミヤは語ってきました』。

　そうなのだと思いました。バビロン捕囚があったこの時だけでなく、今、この時にも、私たちは傍観的に「どうなっていくのだろう」と無責任にならず、剣のような神様の言葉をまともに聴いて、神様との霊の絆を立て直すことが求められているのです。そうでないと、本当の審判の時に私たちは耐えられないのではないでしょうか？でも神様は、最終的に永遠の裁きを望んではおられないお方だと私は思います。主は10節でエレミヤにこう言われました。「見よ、今日、あなたに 諸国民、諸王国に対する権威をゆだねる。抜き、壊し、滅ぼし、破壊し、あるいは建て、植えるために」。―神様はまるで農夫のようです。畑に良い作物が実るためにはこれまでの畑（この世界であり、私たちの心のことでもある）から、まず抜き、壊し、滅ぼし、破壊する、そしてそれが確認できた後、新しく建て、植える、と言うのです。そのように、私たちの心を御言葉と聖霊によって耕すのです。私たちに求められているのは、悔い改めです。一度まっさらにして頂くこと。そしてその心の土壌の上に、神様は新しい種を蒔いて下さる。建て、植えて下さるのです。

[3] 再び、「建て、植える」ために

　私は、今の時代こそ、危機的な時代ではないかと思います。この世の中も、キリスト教会も土台が崩れかかっているのではないかと思えてなりません。特にこの2020年以降の新型コロナの蔓延の中で、何か大きなものが失われていっているように思えてなりません。例えば、主日礼拝を出来なくても仕方がないというエクスキューズ（言い訳じみた思い）が、牧師にも信徒にも入り込んでしまっていないだろうか。もしそうであれば、エレミヤの言葉、いえ、神様の言葉を皆で、或いは個人でも真剣に聞かねばいかないと思います。そうでないと、教会は、抜き、壊し、滅ぼし、破壊、で終わってしまいます。でも、そうじゃない、「今」、神様の言葉を新しく聴くことです！私たちを本当に生かすのは、神様の言葉以外にないのです。政治家の言葉は「アメとムチ」かもしれませんが、神様の言葉は、私たちを本当に生かす愛です！ですから神様は、この世界や私たちの周りの環境に押し潰されることなく、私たちを愛する愛によって、あのローマの信徒への手紙8:28にあるように、「万事を働かせて、益として下さる」と思います。

　このあとで、「主の晩餐式」も執り行います。これも出来るようになったのは神様の憐みですし、出来ない時も通過した、私たち自身の熱望でもありました。このような事柄も含め、神様は私たちの願いに応えて下さる方です。「どうなって行くのだろう」ではなく、私たちが神様の言葉を聞いて、「どうするか」です。

新約聖書を読むと、主イエス様自身、どこまでも人間の救いを諦めないお方でした。あの晩餐の時、周りの者たち皆がご自分の許を去ろうとすることを主は知っておられたのに、その弟子たちの足を洗い（罪を許し）、ご自分の命そのものを示すパンと葡萄酒（＝十字架の血汐）という新しい種を、彼らの心の畑に蒔いたのです！そしてその翌日、十字架について下さいました。私たち罪人を、再び、「建て、植える」ためにです。今、私たち、心の畑に主のいのちを受けましょう。主よ、どうぞこの教会の中にも来て下さい。また、私の内に来て下さい。あなたの言葉によって、新しく生きることが出来るように。お祈り致します。

神様、今日このように共に礼拝が出来て、感謝致します。「今日、御声を聞いたなら、あなた方の心を頑なにしてはならない」とありますが、どうかあなたの声を、常に泉のように新しく聴かせて下さい。そして、聖霊によって新しく生まれさせて下さい。主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。